

月桃のマット

(2025.10)

バスケットリー展で少し実用品の売り上げに供しようかと、月桃でマット類を製作した。(ほとんど貢献できなかったが)

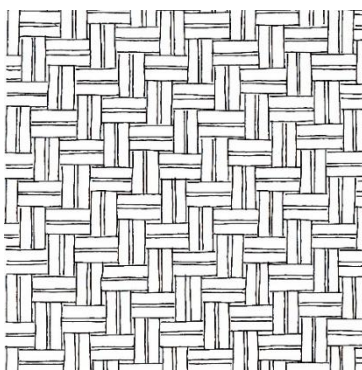
我が家の月桃については、以前の原稿 2025.6 で報告済みである。平らに組んで、ランチョンマット、土瓶敷、コースターなどのサイズにして、周囲はアオツヅラの細い蔓でトワイニングした。

写真の通りあらためて取り上げることもない、どうということもないものなのだが、編み目をじっくり見ると中にちょっと珍しい編み目があるのに気付くかもしれない。A 図は二本揃えの二目飛ばしの網代編み、に見える。でもそれなら裏面も同じはず。しかし、この編み方の裏面は B のようになっている。ちょっと意外な展開。

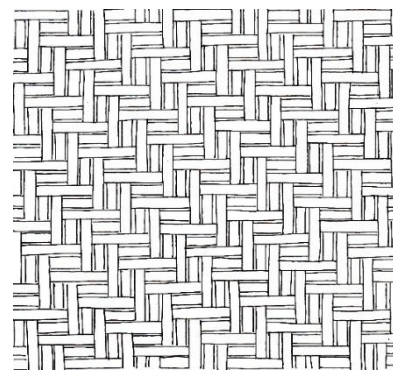
この網代編みには、何度か出会っていて気になっていた。たしか、壁に展示された脱穀用の巨大なかごがはじめてだっただろうか。近づいて内面に囲われてみると方向感覚がなくなった。部分の編み目構造はこれだと思うが、いまだに立体としての全体像がつかめていない、宿題のひとつ。

編み方自体は珍しいものではないらしくて、Common Iban Twills のひとつとして、フィリピンのイバン族の anyam apit と紹介されている本があった。実際の籠は斜めに組まれているので、網代編みと呼んではまずいのだけれど、私の頭でこれを理解するには縦横関係でなければ無理。というわけで、私流の書き方をすると、(3-2-3-4)→5 かなりややこしいが、これで縦横平面は編めるようになった。その成果のランチョンマットである。

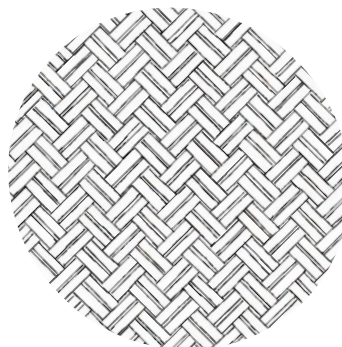
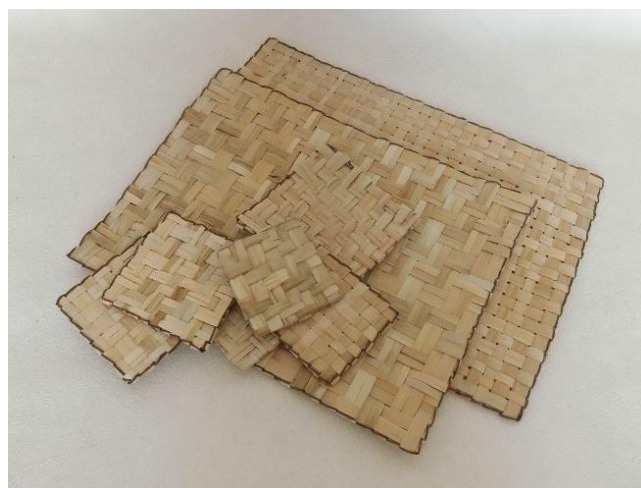
バスケットリーニュースのかごコレクションの中では、「No.119 ベトナムの背負い籠」の側面下部がこの編み方である。ここでは A 面表の斜め組。これを縦横平面でなく斜めにスイスイ編むには、頭の中と目と手をどう連動させればいいのか。



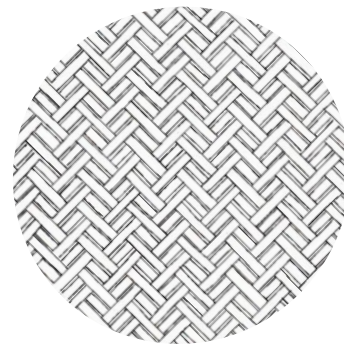
A 面



B 面



A 面



B 面

秋田再訪 (2025.11)

秋田に再び訪れる機会に恵まれた。8年前に秋田県立博物館で開催された「植物を編む」の展覧会関連で行ったのだが、記憶は曖昧になっている。しかし、バスケットリーニュースに記事を書いていた。おかげで詳細に思い出すことが出来る。バスケットリーニュースは脆弱な私の記憶力を補う外付け記憶装置である。ありがたい。

今回は、その時お世話になった博物館の斎藤洋子さんと、ご自宅を訪問させていただいた箕づくりの田口召平さんともまたお会いでき、再びいろいろ教えてもらう機会になった。

それに加えて、前回行けなかった弘前市の観光地、武家屋敷通りを歩き、角館樺細工伝承館で樺細工について知ることが出来た。

樺とは桜の皮で、茶筒に貼られたピカピカつるつるの表面が一番おなじみである。もともとは印籠や根付の細工に使われていたが、近年になって茶筒に特化して一般に知られてきたようだ。その光沢あるイメージばかりでなく、実は自然の木が持つ美しさが様々あるのを今回見てとれた。棚ざらしになっている我が家のサクラの皮を思い出す。帰ったら磨いてみよう。

秋田県埋蔵文化財センターでは、数多くの土器の圧痕を見せてもらった。細かい枡網代の模様まで見て取れる。見ているブルーのシリコンは、レプリカ法という技術で、圧痕の凹んだ面ではなく、押し付けた編み物と同じ表面を再現しているものだ。圧痕そのものより格段にわかりやすい。だいぶ前になるが、この技術の研究をしている人に会っていた。何年か経ち、今や現場ではこれが通常の方法としてすっかり定着しているのを見て、ちょっと感慨深かった。

さて、樺細工伝承館に話はもどるが、樺なのに桜の皮?という疑問もさることながら、皮の剥ぎ方にも気になる点がある。

名久井文明『樹皮の文化史』では。伝統的樹皮剥離法として、3種類があげられている。

横方向に切り込みを入れて、そこを手掛かりに縦に引きはがす、縦剥ぎ型剥離法。上下を切り回してから側面を縦に切り込み、そこから横方向に剥ぐ、横剥ぎ型剥離法。テープ状の材を螺旋形に切り剥がしていく、螺旋剥ぎ型剥離法である。

よくシナの木 of 樹皮採集時の写真として目にするのは、根本近くから上に向かって引きはがしている場面だから、これは縦剥ぎ型だ。

それに対して、サクラの皮は必ず横剥ぎ型である。だから採れた樹皮は平らな四角いシート状になっている。私がだいぶ以前に手に入れてそのままになっていたヤマザクラもこのシート状のものだ。

皮の持つ性質から、縦型/横型になるのはなんとなくわかるのだが、ではどうしてそんなに樹皮の性質に違いがあるのだろうか。

鈴木三男『びっくり縄文植物誌』に説明があったので、抜粋しながら要約してみる。

「樹木は木部と樹皮の間に形成層があり、これが細胞分裂を繰り返して、その内側に新たな木材(二次木部)を、外側には新たな樹皮(二次篩部)を作ります。外側にある古い樹皮が引き延ばされて破れる前に、樹皮の外方部で新たにコルク形成層が出来て細胞分裂を開始し、外周の拡大に対応します。コルク細胞はできると同時に死んだ細胞になりそれより外側にある組織も死んでしまいます。この死んだ樹皮部分を「外樹皮」といい、生きた組織で出来ている内樹皮と区別します。そしてしばらくすると内樹皮内にまた新たなコルク層形成層が出来て、と繰り返すのです。サクラ属とカバノキ属が他の樹木と違うのは、最初にできたコルク形成層がかなり長い間、10年以上も永続的に形成し続けその結果、コルク細胞だけで出来た数ミリの厚さのある外樹皮になるのです」

ということは、生きている内樹皮と違いヤマザクラは死んだ外樹皮ということで、だから貼ることはできても編む素材には向いていないということなのか。でも、希少ではあるが桜皮の背負いかごが存在する。あの材の厚みとしなやかさはどんなものなのだろう。

「植物を使う」ということ

(2025.12)

またまた古い BN 記事を引っ張り出すが、2020 年に、「植物を素材に使うということ」という話を書いた。かご作りとは、植物がやがて腐って土に還る前の時間を一旦止めて利用していることや、剪定した枝をゴミにするときの感じなどが書いてある。5 年経って、そうした繊細な感覚は少し薄れてしまったかもしれないが、大きく変わってはいない。

あらためて植物とのかかわり方と、それを「使う」ということについて考えてみた。

植物は人間や動物と共に生きて、環境を作り出している。共生しているという存在自体で考えると、私たちは鎮守の森や巨木を神聖視したり、景色を愛でたり、育てることを楽しんだりもしている。私の日常のように切り刻んでせつせとゴミに出したりもしているが。

しかし植物のなによりの存在感は、食物としてである。そのままだけでなく、酒、たばこ、お茶、油、薬、香り、毒、、、など形を変えても摂取している。(毒は摂取したくないが。) そしてそれ以外も様々な利用して生活を成り立たせている。

燃料としては、焚火をする、薪、炭にする、焼き畑もするし、灰になってからも様々な利用法がある。最近ではバイオマス発電があるし、バイオプラスチックも。製紙工業、繊維産業のパルプやファイバーなどは原料という感じだ。

ただし、手すきの和紙や手織り布となると、人が使う材料という感じがする。「植物を使う」と言った場合、このあたりからかなと思う。一番素朴なのは、蔓を紐として使ったり、葉っぱで包んだり、もともと器の形をしている瓢箪や竹を切っただけで使うことなどが考えられる。麦藁をストローにしたりもできる。

木材のような塊なら、削ったりして形を変えて、さまざまに利用できる。木工品や木造建築、杭も柱も、弓も丸木舟もこのような利用といえる。

そして、バラバラの線状材を構築して形を作る、というバスケットリーの出番が来る。「植物を使う」という

ことのかかなりの部分がここにありそうだ。

バスケットリーでは、線状、または線状にした素材に働きかけて何かを作る。敷物や容器ばかりではなく、さまざまなものが作られる。

大雑把に列記すれば、農具、漁具、運搬具、諸々の道具類、編袋、パッケージ、玩具・飾り物、楽器、魔除け・信仰関連、装身具(かぶる、履く、着る、飾る、仮面、仮装)、構造物(柵、塀、建物、屋根、壁、床、家具、舟、橋)、財貨、装置、などなど。

規則的な繰り返しがベースとなって二次元の平面、三次元の立体が編まれるが、それ以前に一次元の縄の存在がある。同じ方向に縊られた細い材の束が、複数反対方向に一度に縊られることで力のバランスが取れて戻らなくなり、縄の状態をキープする。力のバランスで成り立つバスケットリーの基本がここにある。一本一本では弱いものが束になって縊りがかけられることで強力なものとなる。それと同時に、長さに関りがある植物が、この動作の過程で次々足されることで、縄は際限なく延長可能なものとなる。

では、いつから人間はバスケットリーしていたのか。

南フランス アブリ・デュ・マラ遺跡で4万年前にネアンデルタール人が作った縄が発見されている。樹皮の繊維の縄で、S 撚り 3 本を Z 撚りとのことだ。
<https://www.hlkmx.com/geoscience/1001006979.html>

2021 年に公開された 10500 年前の大型蓋つきのバスケットは、イスラエルの恐怖の洞窟で掘り出されている。

死海文書、ミイラ、太古の籠 恐怖の洞窟の大発見 | NIKKEI リスキング

日本では縄文時代草創期の土器底圧痕が最古。かごの全体像がわかるのは、8000 年前の東名遺跡遺跡からだ。

勿論、見つかっていないというだけで、それ以前に、気の遠くなるほど長い歴史があったうえでのことである。